

コロナ禍の中で考えたこと

横手明峰中学校 谷口 莉子

予想もしていなかった新型コロナウイルスの流行で私たちの生活は大きく変わった。三月の突然の臨時休校、一年間同じ学級で過ごした仲間や、お世話になった先生方、先輩方との別れでも十分に気持ちを伝えることはできなかった。今年度に入ってから、コロナ禍の影響は大きかった。陸上競技部に所属している私は、全県大会出場を目標に休校中も自主練習に励んでいた。そんな中、届いた大会の中止は悲しいものだった。ただ、私以上に三年生の先輩方にとっては辛い知らせだったに違いない。中学校の部活動の集大成として東北、全国大会を目標にひたむきに練習に励まれてきた先輩方。大会中止の知らせを聞き、涙を流す先輩方の姿は忘れられない。

こうした影響は、私たち学生だけでなかった。仕事が急になくなってしまった人、営業できずに家賃や給与の支払いに苦慮する事業者の方など、新聞やテレビからは悲痛的な叫びがたくさん聞こえてきた。その人たちにも私たちのような家族がいて、その大切な家族の人生も支えていたはずだ。報道で見聞きする話は、いつ自分の身の周りで起きてもおかしくないこととして他人事とは思えなかった。

私はこれまで税金についてあまり深く考えたことはない。それは、消費税など身近で支払うものはあったものの、大部分は親が支払っていて一体どんなものがあるのか、どんなことに使われているのか自分事として考えていなかったからだ。ただ、今回のコロナ禍の中で、たくさんさんの税金が使われる報道を聞き、税金の意味について考えさせられた。例えば、税金が活用されたものとして、全国の国民に対して一律に給付された特別指定給付金、ひとり親の世帯に対して給付されたひとり親世帯臨時特別給付金、新型コロナウイルス感染症対応休業支援金等がある。これらが支給されたことで助けられた人は多かったはずだ。もしも、こうした予想だにしない事態が訪れた時に、このような困っている人たちを支援するだけのお金がなかったら、世の中はどのようなになってしまうのだろう。

税金を納めることで、自分や自分の大切な人たちの今や未来を守ることができる。遠く普段は出会うこともない誰かを救うこともできる。自分がその第三者に救われることだってあるかもしれない。最近では税金を使い、スポーツ団体を支援する補正予算が組まれたと聞いた。感染症予防や大会の運営への支援がなされれば、先輩方のような悲しい思いをする人も減るかもしれない。こう考えると、納税とは、意義深いものであることに気づく。

私自身は今現在、税の恩恵を受けている立場にいる。誰かの支えがあって今の自分があることへの感謝の気持ちは忘れないようにしたい。そして、将来、納税者になったとき、自分や大切な人たちを守り、遠くにいる誰かと支え合っていることに希望と誇りをもって生きる私でありたいと思う。